

# 女子短大生の起床時の生活行動の実態

加 來 卯 子 ・ 八 尋 俊 子

## A Study of Actual Daytime Activity Patterns of Women Junior College Students

Shigeko KAKU and Toshiko YAHIRO

### Abstract

This paper is a report of a survey taken of how second year home economics students use their time. Six life activities were examined; contact with family, housework, learning outside the classroom, media contact, television viewing, and talking on the telephone while at home. Also time spent at their part-time jobs. The results showed that:

- 1) Mass media contact time is the greatest of all six areas. In particular for both students living at home and living alone the ratio of time spent watching television was high. However, there are students (14.3%) who have no media contact. Some students (15.0%) reported no family contact at all.
- 2) Of students reporting on part-time jobs, 39.4% worked on weekdays while 53.2% worked on Saturdays and 48.0% worked on Sundays. In particular students living at home had more part-time jobs. Many students who started their part-time jobs in the evening finished after 9:00 p.m. The average working day was six hours. There are many opinions about the reasons students have part-time jobs, including: to earn money, and to learn how to fit into society were the most often mentioned. How the students use their incomes were as follows: clothing expenses were highest, followed by savings and food expenses. Basically they use their money to make their lives more enjoyable.

Key words: survey of time use	生活時間調査
life activity	生活行動
media contact	メディア接触
part-time job	アルバイト

## 1. 緒 言

自立した生活者を目指して歩むことが望まれる女子短大生のライフスタイルには、前報<sup>1)</sup>で指摘したように生活の夜型化や生活習慣の乱れの兆候など、現在さまざまな問題が見受けられる。生活の質を検討するとき、生活時間の内容が問題とされることはすでに述べたが、NHKが行っている国民生活時間調査<sup>2)</sup>によると、大学生は高校生に比べ、授業や学校の行事、学外学習など学業の時間が減少し、レジャー活動や個人的つき合いなど自由時間が増加していること、また、アルバイトに従事する者が増加していることなどが報告されている。

社会の急速な変化に伴ない、学生を取り巻く環境

も大きく変化してきており、それらが学生生活に影響を及ぼしていることが考えられる。学生の生活時間の実態を調査することにより、生活時間の内容の一般的な傾向を知ることができれば、その結果を教育現場へ反映させることができ、学生指導にも有益であると考えられる。

前報<sup>1)</sup>では、女子短大生のライフスタイルの実態を把握するため生活時間調査を行い、生活必需行動の中の睡眠に注目してその特徴を検討した。本報では、起床在宅時、外出時における生活行動のなかで、特に女子学生に特徴があると思われる行動について着目し、それらの時間的実態の傾向について検討を試みた。

## 2. 調査方法

### 2-1. 調査対象者および調査期間

前報<sup>1)</sup>と同様である。

### 2-2. 調査項目

生活時間の記入方法については前報<sup>1)</sup>と同様である。記入された生活行動の中から起床在宅時における家族との触れ合い、家事、学外学習、メディア接触、テレビ視聴、通話時間の6つの生活行動と外出時における行動の中でアルバイトを取り上げ、その時間量、意義、得られた収入の用途について検討した。なお、テレビ視聴についてはメディア接触の中から、特に他のメディアと分けて集計した。また、ながらテレビ視聴は除外して分類した。

## 3. 結果および考察

### 3-1. 起床在宅時における生活行動

家族との触れ合いの時間量分布と行為者率を図1に示す。図より家族との触れ合いは日曜、土曜、平日の順に長い傾向にある。3曜日とも触れ合いの時間が全くない学生も35%前後おり、また、自宅通学生のみで見ると、その約15%が全くないと答えている。自宅通学では家族が就寝した後の遅い帰宅や家族各人の生活時間のズレ、および一人暮らしや寮生では居住形態の影響が考えられる。しかし、在宅時に家族がいても触れ合いを好まない学生も見られ、これらの理由は今後さらに明らかにしたいと考えている。

図2は家事に充てる時間量分布と行為者率を示すが、平日、土・日曜とも40%前後の学生が‘なし’と答えており、また、家事を行う場合、3曜日とも1時間未満が最も多い。自宅通学、一人暮らし、寮の居住形態の違いが家事の時間量に及ぼす影響を見ると、後述の表2に示すように、特に自宅通学生の時間が少なく、家事を家族に大きく依存している状況がうかがえる。上記の‘家族との触れ合い’や‘家事’の時間量から、家族との共同や拘束性の強い生活行動に充てられる時間が少ないことが理解され、短大生の家庭生活においても家族の個人化<sup>2)</sup>の傾向が進んでいることを示唆していると考えられる。

学外学習の時間(図3)では曜日によって多少異なるが、およそ50~56%の学生が‘なし’と答えている。平成11年より小学校、中学校、高等学校と順次施行された新学習指導要領では、ゆとり教育が推進されているが、その結果子どもたちの勉強離れがマ

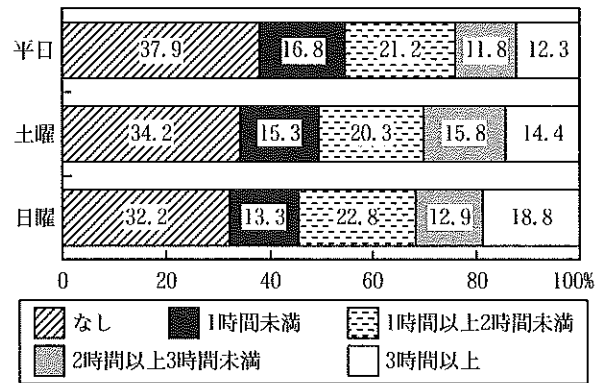


図1 家族との触れ合いの時間量分布

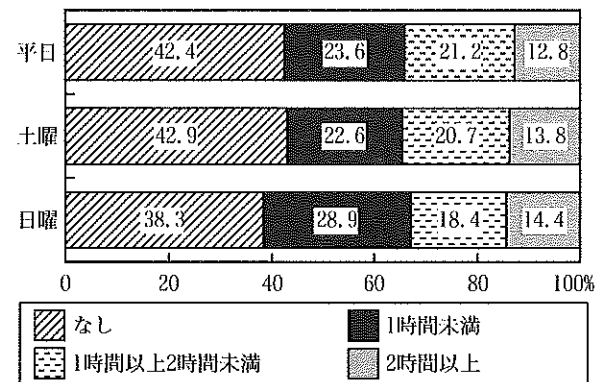


図2 家事の時間量分布

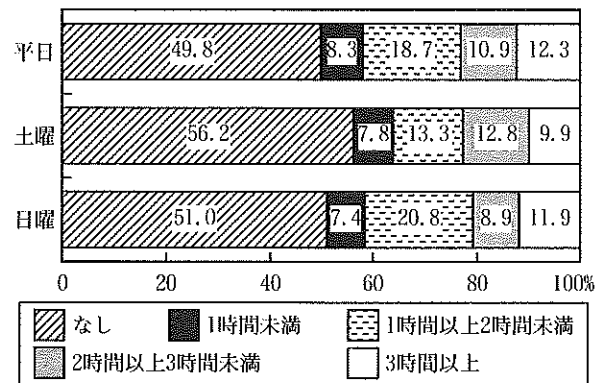


図3 学外学習の時間量分布

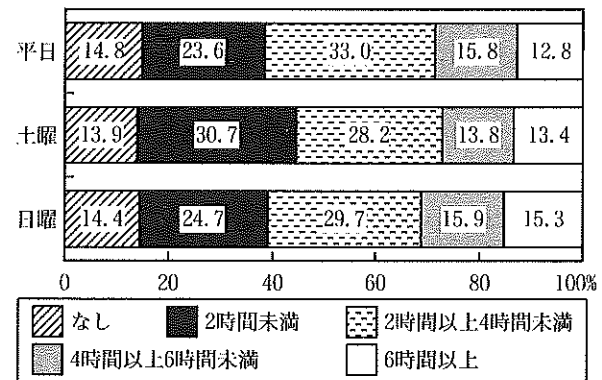


図4 メディア接触の時間量分布

スコミ等で指摘されている。本調査の場合も対象者が2年生であり、時間的余裕は十分あると考えられるが、勉学へ自主的に取り組む姿勢は入学時と比較すると次第に薄らぐ傾向にあり<sup>4)</sup>、学業面への積極性に欠ける面がうかがえるが、この現状は教員側としてもよく認識して対処すべき問題であろう。

メディア接触 (図4) では、3曜日を通して‘2時間未満’および‘2時間以上4時間未満’の学生が多く、さらに30%前後の学生は‘4時間以上’で、起床在宅時における生活行動の中では充てられる時間が最も長い。しかし、3曜日を通して全く接触していない学生も14.3%見られる。

なお、メディア接触の中から、テレビ視聴の時間 (図5) を取り上げて時間量分布を見たところ、メディア接触と同様、‘2時間未満’および‘2時間以上4時間未満’と答えた学生が多く、メディアの中で、テレビ視聴に占められる割合が大きいことが明らかである。学外での学習時間が減少した一方で、わが国におけるテレビやビデオの視聴時間は世界的に見ても最多であることが指摘されており<sup>5)</sup>、女子短大生においてもその傾向がうかがえる。

携帯電話は、現代の学生にとってなくてはならない重要な通信手段である。そこで電話の通話時間 (図6) に関してはかなりの時間が割かれているものと推察していたが、結果は予想とは異なり、在宅時の電話に充てる時間は50%前後の学生が‘なし’と答えており、電話をかける学生の中では‘30分以上1時間未満’が最も多かった。これは携帯電話の普及による短時間のメール交換が進展していることを示唆していると考えられる。

表1は、先の起床在宅時における6つの生活行動のそれぞれの行為者平均時間を比較したものである。3曜日で比較すると、各行動とも時間量にほとんど差は見られない。また、行動の種類別では、メディア接触の時間が顕著に長く、メディア接触の中ではテレビ視聴が85%を占めている。次いで、家族との触れ合い、学外学習の順になっている。テレビ視聴の時間がこのように長いのは、学生たちが生まれたときからすでにテレビが存在する環境に育ち、在宅時にはテレビのスイッチがついているのは日常生活の中で当然のことで、学生たちにとってテレビ視聴が幼いころから習慣化されているためと考えられる。そして彼女たちの日頃の声として‘誰もいない静寂の部屋で過ごすことに耐えられない’との気持ちも伝わってくる。NHK国民生活時間調査 (2000年)<sup>6)</sup>によると20代女性の平均テレビ視聴時間は平日2時

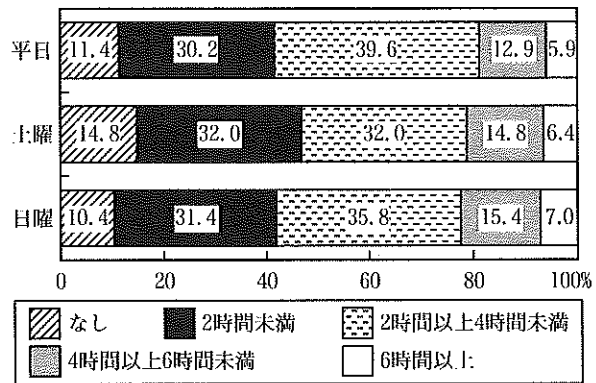


図5 テレビ視聴の時間量分布

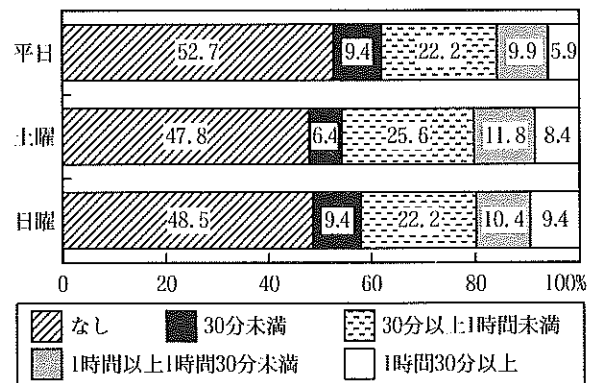


図6 通話時間の時間量分布

表1 起床在宅時における各行動の行為者平均時間量

	平日 (時間 分)	土曜 (時間 分)	日曜 (時間 分)
家族との触れ合い	1:10	1:20	1:32
家事	0:43	0:49	0:46
学外学習	1:06	0:58	1:05
メディア接触	2:53	2:49	2:55
テレビ視聴	2:28	2:25	2:29
電話	0:22	0:26	0:25

間25分、土曜2時間11分、日曜3時間であり、これらと比較すると短大生の結果は日曜が30分短いものの、平日、土曜はほぼ同様の傾向である。テレビが一般に普及し始めた1960年代以降の約40年間で、テレビは日本人の生活を大きく変えたといわれるが<sup>7)</sup>、本調査の結果からも、テレビが学生たちの生活に深く浸透しており、前報<sup>1)</sup>のように生活の夜型化などライフスタイルの変化に影響していることが推察される。

表2は居住形態別に6つの行動の平均時間を比較

表2 居住形態別各行動の平日行為者平均時間量

	自宅 (時間分)	一人暮らし (時間分)	寮 (時間分)
家族との触れ合い	1:37	0:09	0:19
家事	0:29	1:22	0:39
学外学習	0:57	0:44	3:20
メディア接触	2:31	3:50	3:37
テレビ視聴	2:17	3:27	1:19
電話	0:20	0:29	0:19

したものである。家族との触れ合いの時間は必然的に自宅通学生で長く、家事は一人暮らしで長い。学外学習の時間は寮生が最も長い、寮がキャンパス内にあり(2001年度まで)、また、ある程度規律ある生活を強いられる勉学に適した環境にあることに起因していると考えられる。メディア接触の時間は一人暮らしと寮生が自宅通学より長く、その中のテレビ視聴は一人暮らしが最も長く、次いで自宅通学で、寮生は共同で視聴するため最も短い。電話の時間は一人暮らしの学生が最も長く、電話によるコミュニケーションを求めていることがうかがえる。

居住形態別に6つの行動のうちからテレビ視聴を除く5つの行動の平均時間を合計したところ、自宅通学生は5時間54分、一人暮らしは6時間34分、寮生は8時間14分と顕著な差がみられ、自宅通学生はこれら5つの行動以外に時間を使用していること、すなわち、それらがレジャー活動などの自由時間行動やアルバイトに向けられていることを示唆すると考えられる。

### 3-2. 外出時における生活行動

外出時における生活行動については短大の授業、個人的つき合い、レジャー活動などさまざまな行動が見られるが、本研究では特にアルバイトに着目した。図7はアルバイトの行為者率を表しているが、平日39.4%、土曜53.2%、日曜48.0%の学生が従事していることがわかる。表3は居住形態別の行為者率である。3曜日を通して、自宅通学生の行為者率が顕著に高い。自宅通学生は、一人暮らしのように家事に充てる時間の必要性はなく、寮でのように規制による時間的制約も少なく自由裁量の時間を確保しやすいこと、また、金銭の多寡はあっても家族からの仕送りがある寮生や、一人暮らしに比べて自由に使える小遣いが少ないなどの理由から自宅通学生

のアルバイト従事率が高くなっていると考えられる。図8に平日、土・日曜のアルバイトの時間量を示す。図から、平日より土・日曜に長い傾向が見られ、また、アルバイト従事者の平均従事時間は3曜日を通して6時間に及んでおり、調査対象者の多くがアルバイトに長い時間を費やしている現状が認められる。次にアルバイトに従事する時間帯について考察する。データは平日、土・日曜を合わせた複数回答で示している。図9はアルバイトの開始時刻を示すが、最も多いのは17時からの71名、次いで9時からの40名、18時からの38名の順で、17時以降に開始する学生が38.7%となっている。終了時刻は図10のとおりで、最も多いのは22時の58名、次いで23時の56名、21時の43名の順になっており、21時以降に終了する学生が56.2%である。このようにアル

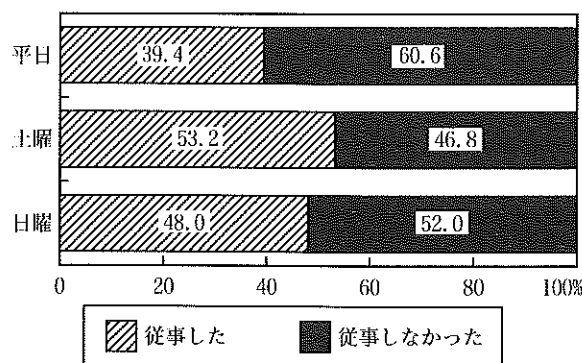


表3 居住形態別アルバイトの行為者率 (%)

	平日	土曜	日曜
自宅	49.6	63.3	59.7
一人暮らし	24.4	40.0	31.1
寮	0	6.3	0

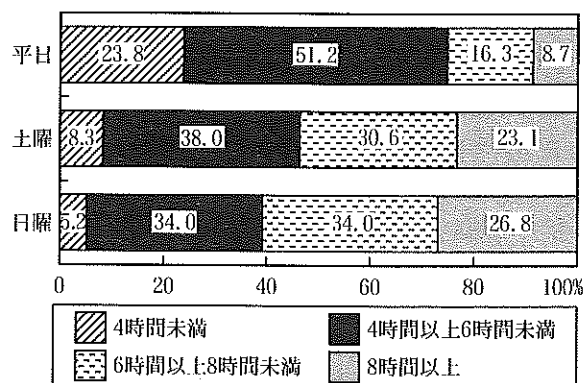


図8 アルバイトの時間量

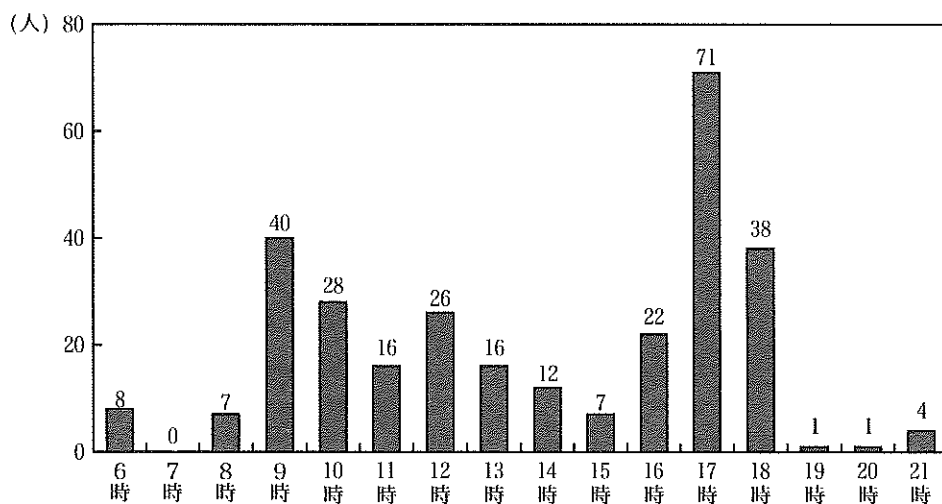


図9 アルバイト開始時刻別行為者

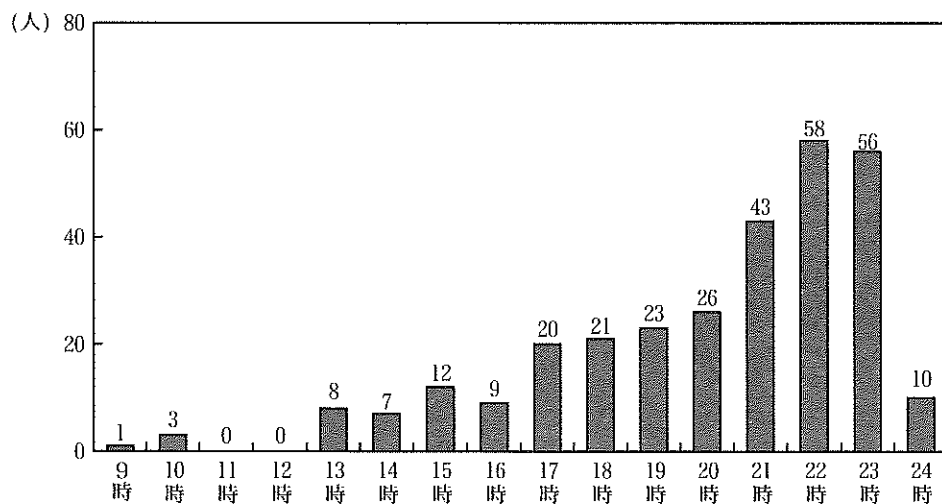


図10 アルバイト終了時刻別行為者

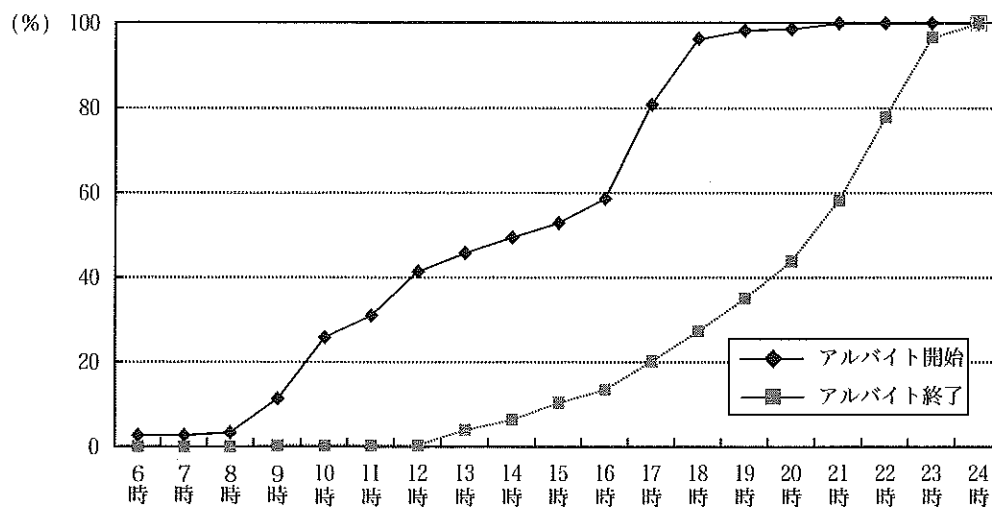


図11 アルバイト開始時刻および終了時刻別行為者率

バイトの終了時刻は遅い学生が多く、通勤時間が長い場合、帰宅する時刻はかなり遅くなることが推察され、従事者本人および保護者とも防犯などの安全面については十分留意する必要がある。

図11にアルバイトの開始時刻と終了時刻の行為者率を示す。昼間より、夕方から夜間にかけての行為者率が高いことがわかる。このように遅い時間に従事している学生が少なくない状況であるが、これは前報<sup>7)</sup>で指摘したように不規則な摂食や就寝行動などで健康を損ねたり、生活リズムの深夜化につながっていくことが懸念される。

次に、アルバイトの意義について尋ねた結果を図12にまとめた。自由に3つまで記述させたところ、最も多いのが、‘収入を得る’であり、次いで‘社会勉強’である。さらにアルバイトに‘友達との触れ合いや交流’を求めている学生もいる。2年次になり、時間割に余裕が出てきたためか、‘空き時間を活用する’と答えた学生もいる。

アルバイトで得た収入の使途についても同様に3つまで記述させたところ、図13に示すような結果が得られた。‘被服費’と答えた学生が最も多く、次いで‘貯金’‘交際費’‘食費’の順になっており、収入のほとんどが自分のための自由なお金として使用されている。しかも自分を向上させる教養的な目的のための資金ではなく、若い女性に関心の高いフ

ァッションや食費、あるいは人間関係を円滑にするために必要な経費として使用されている様子がうかがえる。テレビ視聴時間が長くなると視聴者の消費水準が引き上げられることが指摘されているが<sup>8)</sup>、学生の視聴時間の長さは彼女たちのファッション化した生活を支える消費に影響していることが推察される。青年期は経済的自立を促す時期であり、アルバイトにより小遣いを自分でまかなおうとすることには意義があると考えられる。本調査からもアルバイトによって‘自分の経済’を手に入れた状況が認識されるが、保護者に扶養されつつ経済的に豊かな学生生活を送っている側面が認められる。

#### 4. 要 約

本学家政科2年生を対象に生活時間調査を行って、起床在宅時における家族との触れ合い、家事、学外学習、メディア接触、テレビ視聴、通話時間の6つの生活行動と、外出時におけるアルバイトについて検討した。結果を要約すると以下の通りである。

- 1) 起床在宅時における6つの生活行動について行為者平均時間を比較すると、マスメディア接触時間が最も長く、特に自宅通学生、一人暮らしではマスメディアの中でテレビ視聴に占められる割合が大きい。しかし、‘マスメディア接触なし’も14.3%

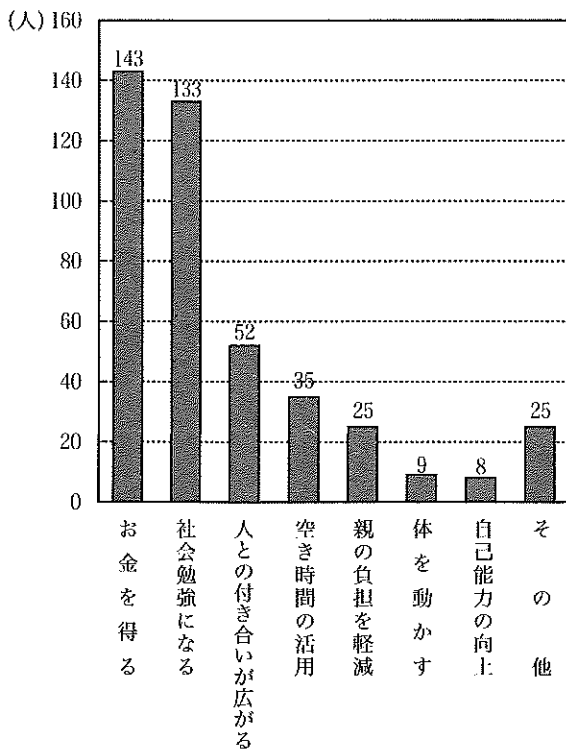


図12 アルバイトの意義

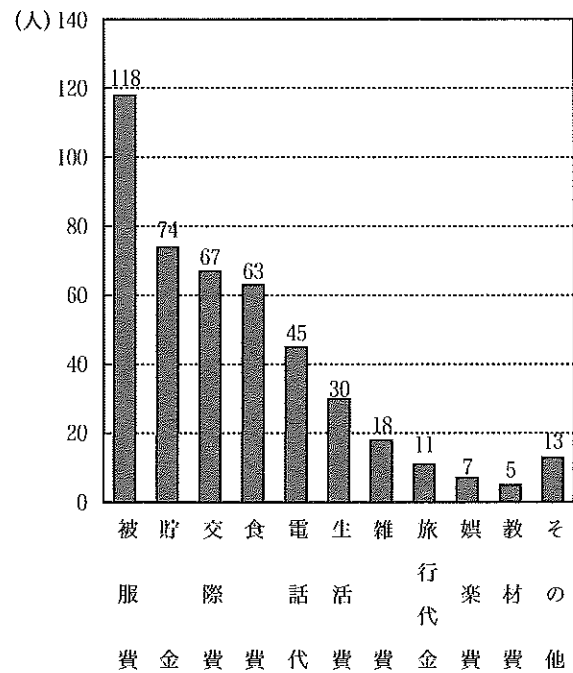


図13 アルバイト収入の使途

見られる。

‘家族との触れ合い’は日曜、土曜、平日の順で多い。しかし、‘触れ合いがない’が自宅通学生の約15%に見られる。

拘束行動の家事、学外学習の行為者率および平均時間は共に少ない。

- 2) アルバイトの行為者率は平日で39.4%、土曜53.2%、日曜48.0%で、特に自宅通学生の行為者率が高い。

アルバイトは夕方から開始し、夜9時以降に終了

する学生が多い。また、平均従事時間は6時間である。

アルバイトの意義については‘収入を得る’‘社会勉強’が顕著に多い。用途については‘被服費’が顕著に高く、次いで‘貯金’‘交際費’‘食費’の順で自分の生活を楽しむ用途に向けられている。

本論の概要は2001年度日本家政学会第53回大会において発表したものである。

### 引用文献

- 1) 八尋俊子、加来卯子：西南女学院短大紀要、49号15-19、(2002)
- 2) NHK放送文化研究所編：図説日本人の生活時間1990年版、日本放送出版協会、東京、144-147 (1992)
- 3) 生活の質を問う-1-、家政誌、53、102-103 (2002)
- 4) 加来卯子、新村律子、八尋俊子：西南女学院短大紀要、46号、99-111 (1999)
- 5) 読売新聞、2001年6月29日付
- 6) NHK放送文化研究所編：日本人の生活時間・2000、東京、182 (2002)
- 7) 同上、148-149 (2002)
- 8) ジュリエット B. ショア：浪費するアメリカ人、岩波書店、東京、124-129 (2000)